

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	冬ざれ : 文苑
Author(s)	不割
Citation	龍南會雜誌, 1 2 3 : 4 7 - 5 2
Issue date	1907-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6074">http://hdl.handle.net/2298/6074</a>
Right	

頭が乱れにくれて、堪へられぬ様にちつたので、良輔は障子を開いた。心地好い風が嘲ける様にスート這入つて來ると、同時に雀が、二三羽、飼を拾つて居たのが驚いて庭から舞上つた。飛んで行く雀を眺めて居た良輔の手にはいつしか生徒の答案が握られて居た。

## 冬　ざ　れ

不

割

## 『一』

忘れ難き過去と知り得ぬ未來との間を縫うて、一條の慰めを露の身に投ぐるのは現在である。空想の樂々みを生み、希望のきらめきを産む。例へば谷川の細き流れを、岩に堰かれてゐる淵にやがて瀧津瀬とみだるゝまでは、實在の姿に不屈の覇氣が籠つて居る。けれども一度切岸の上に立つて、底ひも知れぬ溪谷の中に、瘴霧の立ち上るを見下ろした時、そこに絶望の涙は早止むに由がない。かの赫灼たる百千の色系につながれて、うつくゝい夢が、羽子板の押し繪がぬけ出でたやうに、思ひ寐の枕の上にはかない笑みを描き出しても、惑ひにくれて得知らぬ運命のはては、若人の知る春である。その昔、龍燈の松に灯がともつて、怪燭遠く八百潮の彼方に女仙の姿を招いた時分から、迷路は人界を封じて、遂にどこへへの神秘である。心の勝利に荒涼たる怨みが消え失せても、暖かい思ひが五月の息に通ふても、ゆきすりにふとの笑まひうれしいばかりで、先の世に別れ魂たは、常世の霧にへだてられて、天外互に戀ひしい思ひを通はすがら、しかも到底逢ふ時があ

は。むなげき望みの花が咲いて凋んで、果ては冷めたい泥どかはつて、愁人の心は更なる悲痛である。

細い月が成相山の上に照つて、硝子越の與謝灣は渺々と水けむりの色にほのめく。浪は静かに龍燈の松によせて、橋立のかげ淡く奔蛇の姿にうつる入江を、岩瀧の方に灯が更けた。

薔薇を碎いてもゆるる炎に、解けたる紅を白がねの皿にうけて、雪と凝つた膚が匂ふ。ゆく衡ゆかしき琴のしらべの、かはるゝ織手につれて鳴る音は思ひよ、琴柱にからむ紅は、袖口もるゝ友染の、もて花さくうつくしさである。曲のすゝみに無心の唇は、かるく動いて微吟の歌を洩らす。『千々にものこそかあしけれ』と鹿のあく音に眼をさます、夕ぐれ秋のさびじきに泣けどか。龍燈の女仙が姿をこゝに、弾じやめて琴爪はつす指の三つに、細い血潮がみあぎつて、あふれて通ふ頬は櫻と緋牡丹もゆる櫛の上の半面が被ひあき灯火の片側で照らされた。背の高い桐火鉢に、左手ばかりをさし出して、ちつと向ひに座つて居る幸之助を見る。

やがて、ふくよか頬に笑みを刻んで、うるささうにはつれ毛をかき上げるはづみに、袂が膝にくづれて八つ口の紅がちらとこぼれた。

女は云ふ。

『た話をうかがつて見れば、それも御尤ですけれど、父様だつて、を母様だつて、あなをきつと守つてくださるんだ、それに……』

一寸口を切つて奥歯をきりよとかむ。

浮世を知らぬ、十九に若き心と云へば幸之助は未だ子供である。思はぬ事に足あへどあつて、未だ東西も分かぬ頃から、世人の呪ひは不具ある彼の上にあつた。乳母の背にた月さんをあがめて、手を合せて拜んで居た搖籃の中は兎も角。物心がついてからは、唯運命のつたなきに泣くより外に思ひはない。幸之助は幾度か死を決して、しかも父母のあげきを顧みては、今も猶かくわびしい星の下に、泪を友のはかない命を、惜しからぬに長らへねばあらぬと自ら云ふ。あゝ彼は過去よりも樂き現在をよろこぶ事をせず、却て茫漠たる中に消れ去つた空しき過去の記憶をよびかへさんと、様々の想像を逞しうするのである。胸をゆきする思ひの糸は、女の手に繰られ、その中を彼の心が躍る。

## 『二』

女は此の点に於て彼よりも強者である。幸之助は女の前にあはれみを乞ふやうにうつぶすになつた。今はもう彼の心は女の領で、やさしい心の堪へかぬる様につと握られた手を放さうともせぬ。『それに、妾だつてもかうしていつまでも慰めてあげるんだから——一所に居あくなつたつて——ね……』

と、語をふるはく膝をよせる。幸之助は唯さうつむいて泣くより外はあな。涙の糸が細くつながら、はてはうらみの琴とひびかう。

膝裡に落つる潮風の、一灣の松をめぐる音に、ふと二人が我れにかへると、沖ゆく舟の灯は、文珠堂の鐘にふけて、追分の聲が寒い空氣に静かな波動を與へつゝ鼓膜をうつ。千年の洞に物のひび

きが狭い出口から迷つて、それがやがて夢とうすれてゆく長いかすかな調子に引き込まれて、女が思はず、

『いゝ聲だわね』

と云ふ。幸之助は寂しい眼を沖のくらきにそゞろながら、聞き取れぬ位小さい聲で

『あの聲の消えてゆくやうに、この身軀があくあつてしまつたら』  
ため息の末がかすかにふるへた。

花さく春を樂しと云ひ、月てる秋をかあしと云ふのは、のぞみある人の子のつれづれあるまゝの心やりにすぎぬ。秋が來たと云つて泣く事の出來るは、その中に反映されてたのしみがひそんで居るからだ。桐の一葉も、落花の色も、同じ思ひに見る者は、生命こそ、幾年を思ひ出の心にいひ知らぬ涙を催さしめる悲しい名である。光榮は最早彼等のぞみではない。仰いでは異なる雲のゆきよにあき、俯してはゆく水のかげに悶わる。あゝこのみがかぐさめのよすがである、つきぬ思ひ出を忍ぶの草に、すだく虫よりはかない涙を、かけて祈るは死のみであらう。

けれども、幸之助の頬には今血の色が上つて來た。紅の女になぐさめられて、あたたかき胸の思ひに一夜を語つた彼は、既に元の心ではない。その人が許さば姉とも呼ばう。今はうれひの雲をはれて、耻しけれごうれしい心を、潔くそゞろべき人を得たのである。

朝の光はかくて、幸之助のかゞやげる面の上に大いなる天地とあけをめた。

小春日のかけがやゝたけて、障子にうつる木の葉の色も漸々にうすくあつてゆく。幸之助が据ゐた机の前で、新聞をひろげて居ると、冬の蠅が二三度顔のあたりをさまようて、椽に乾してある座布団にとまる。見ることもかきに目をそれに移すと、一番後ろの足を舉げて小さい翅を拭ふて居る婆が、妙に動いて面白いので、みいられた様熱心にある。かざりと庭に高う酌いて、残つて居た桐の朽葉が、何にさそはるゝとあしに落ちたので、ふと我れにかへる途端出船の汽笛が鳴つた。

潮の香清き入江の波に、舞鶴行の船は紅の女があはれみの涙を乗せて走る。彼はその江尻の沖へ遠かりゆくかげを名残惜しげに見送りつゝ、番うた言葉をくりかへして、唯永久にと祈つて居た。波路はるかに黒崎の彼方を、橋立の松に思ひを残して、女は同情の盡きぬあさけをたのが心に盟うたのである。

與謝灣の白波と橋立の松風とに、幸之助の一月は程かくれて、やがて女から小包が届いたが、うつり香ゆかしき琴爪に添へし水莖のあとがうれしかつた。

墨の香匂ふ封筒の下の方を静かに切つて、丸めて火鉢の中へつと落す。さら／＼どくる巻紙の中にこめ／＼思ひは誠であつても、轉變の世に幸之助をまもるなさけの糸はきれてしまつて、再びさびしみの『獨』とあつた。左手で繰られて右手をすべるたけの長きにくらべては、あゝその一夜のあまりに短かつではあいか。紅の女は逝いたのであるそが驕りの眼ざし今は閉ぢて、盟ひの言は形骸と共に葬られた。初元結のむすびそめてしねにしの糸は、細かつたのが運命であるか。斷れてくや／＼浪の音に、黒崎にかくれた船のうねりをすらかへすべきすがもあい。庭の玉水さら／＼に昔を

思へばと云ふ人があるけれど、あまじひのあさけにあきらめらぬが誠の思ひである。

涙ににじむ眼に讀んで、得堪へあかつた幸之助は、紅の女が松風によそへしその夜のかたみと贈つた形見の爪を抱いて、獨り——唯獨り——切戸を出で入る潮をあがめてさまよふて居る。

(十二月八日稿)

## 釣魚道樂解嘲

喰 噁 漁 人

左の一篇は予が利根河畔に在りし頃戯に草せる「大利根の釣遊」と題せる未定稿の一小冊子中の一章なり喰噁漁人といへるは假設釣客にして全篇此釣客が釣道の遺詣を講述するに擬したるなり

『人は各其道樂とする所なかる可からず、少くとも此社會に或種の事業を爲さむが爲めに生活する者は、必ず或種の道樂を有せざる可からず、疲れたる頭腦に新鮮の血液を與へ倦める精神に活氣を補充するは道樂の唯一目的あればあり、只生活する爲めに生活するものゝみ、言を換ふれば、とかくも一生を無事安穩に、寒からず飢じからず過ごさむとの冀望の外、何等の目的をも有せざる者のみ道樂を有するの必要なく又其權利あり』

こは喰噁漁人が其釣魚道樂を辯護せむが爲めに用ふる劈頭第一の定文句あり。然れども漁人が釣魚道樂は、果してさる必要と權利とを有する道樂の中に入るべきものなるか、そは暫く疑問に屬すべし。